

小川洋子『シュガータイム』論

——〈病い〉と〈疾患〉をめぐる語り——

本論文は、小川洋子『シュガータイム』における「病氣」をめぐる語りについて、医療人類学における議論を踏まえて分析すること、文学作品における〈病い〉の語りについて分析することを目的としたものである。

序章では、先行研究を踏まえ、従来『シュガータイム』をめぐる語り手であるかおるの「過食」についてその要因を分析しようとするものがほとんどであったことを示した。これに対して本論文では、かおるが自身を「病氣ではない」と繰り返し語っていることに着目して分析を行うことを確認した。

第一章では、かおるの「病氣」観について検討するために、医療人類学の議論を参照しながら、「医学事典」をめぐる語りと、航平の「背が伸びない病氣」をめぐる語りについて分析した。アーサー・クラインマンは、個人の〈患うこと〉の経験としての〈病い〉と、生医学によって治療者によって診断される〈疾患〉、そしてその患者が属する社会において病と見なされる〈病氣〉との三つを区別して定義すべきだとする。このことを踏まえてかおるの「病氣」観を分析すると、かおるにとって「病氣」であることとは、「医学事典」に示されるような〈疾患〉であるかどうか、また、周囲から〈病氣〉であるとみなされるかどうか、ということとパラレルな問題であることが分かった。

奥田智也

第二章では、かおるの「病氣」観を踏まえて、吉田さんの「不能」をめぐる語りに着目して分析を行った。かおるにとって吉田さんは、「不能」という〈疾患〉を抱える存在ではなかったものの、吉田さんは自らを「癒される」べき存在、つまり〈病い〉を抱える存在であると認識していることが明かされる。かおるは吉田さんの手紙によって、個人の内面の問題としての〈病い〉に目を向け、自身の「異常な食欲」についても、〈病い〉の問題として捉え返し、航平と「含まれあっている」関係を築こうとしている、と結論付けた。

終章では、第二章までの議論を踏まえたうえで、再度かおるの「食欲」をめぐる語りについて分析を行った。はじめかおるは自身の「食欲」について、確かに〈病い〉の経験を持つていたことが分かる一方、吉田さんと連絡がつかなくなつてからは、その「食欲」によって空虚さが癒されると語っていることを確認した。しかし、最終的には、「オーロラ」に象徴される吉田さんによつてもたらされた空虚さと、食欲とが並置され、ともに〈病い〉として再認識されることを指摘した。そして、小川洋子『シュガータイム』を、かおるが内面の問題としての〈病い〉の在り方を再発見する物語であると結論付けた。

灰谷健次郎『兎の眼』における「ぐれる」教師像

——高度経済成長期の包摂と排除——

須崎謙吾

本論文では、灰谷健次郎『兎の眼』において描かれた、周縁化された子どもたちへの教育実践がもつ同時代および現代の教育への批評性を論じることを目的とした。

第一章では、不適応児の鉄三に対する小谷の教育実践を、経験による私的な学びと公教育における学びという軸から考察を行った。これまで小谷の実践は教師としての立場ではなく一人間として対等な立場で接しているという評価がされてきた。しかし小谷と鉄三によるハエの研究は、鉄三を徹底的に公教育へと包摂しようとするものであった。さらに小谷はその完成を鉄三の文章能力の上達にあるとして作文教育を行い、二語文しか書けなかった鉄三は自分の感情を文章にすることが可能になる。以上より小谷の実践からは、鉄三を公教育へと包摂する教師としての立場が浮き彫りになるのである。

第二章では、小谷による「精神薄弱児」のみな子への実践を考察した。当時の特殊教育は、障害児教育の確立、発展を目指すという側面があった一方で、障害の種類、程度によつて判別し、障害児を排除することで「普通教育」の効率化を目論んだものでもあった。小谷はこのような状況の中でみな子を「普通教育」へと包摂しようとするが、その実態は「健常児」と「障害児」の上下構造を再生産

するものであった。

第三章では、小谷に代表される若手教師たちがなぜ既存の教育体制に反抗するのかを、若手教師たちの受けてきた教育の観点から考察した。小谷らが教育を受ける側であった一九五〇から六〇年代は、学習指導要領から「試案」の表記が消え、全国一斉学力調査が始まるなど教育の規格化が進み、その規格における包摂と排除が強化された時代であった。物語序盤、小谷は教師生活の辛さから「ぐれる」ことを選んだが、どれだけ遊ぼうともその辛さが解消されることはなかった。しかしその「ぐれ」は、周縁化された子どもたちを包摂しようとすることで小谷に充実感を与えるものとなる。したがって小谷らの実践は既存の教育への批評性をもったものだだったのである。

終章では、みな子への実践の不完全性が現代の特別支援教育への批評性をもつことを確認した。現代のインクルーシブ教育は全員を「普通教育」で教えようとする立場と、特別な場と「普通教育」の場の往還をすべきだとの立場に分かれている。障害児を完全に「普通教育」の場のみで教えようとするもののそれが不完全に終わる本作品は、相対する現代のインクルーシブ教育に一つの回答を提出するものだったのである。

詩吟が果たす教育的役割の研究 ——漢詩作者の理解と実践を通して——

井 上 寿 美

私が詩を吟じる時に一番大事にしていることは作者の思いを伝えることである。頼山陽は自身の母を詠んだ詩を多く残している。母を思う詩を吟じる時には、山陽の母への思いや母から山陽への思いを理解することが必要であった。頼山陽は「詩は吟誦してこそ人の魂を動かすものとなる」と漢詩を書き下し文で吟じる有効性を述べている。これは作者の思いを伝える詩吟に通じる考えであろう。本大学院に入ってから杜甫の「春望」を吟じる機会が増えた。「春望」の「家書万金に抵たる」に込められた作者の思いを理解するために、杜甫の家族について深く知る必要を感じた。だが、杜甫は生まれてほどなくして実母を亡くし、叔母に育てられているためか、実母についての記述は見あたらなかった。そこで、杜甫の詩の中で詠まれた「母」の用例を集め、その母親像を明らかにした。『杜詩詳注』に収録された杜甫が叔母のために書いた墓誌銘には、叔母の子と杜甫が同時に病に臥せていた時に、叔母が自分の子より優先して杜甫の命を助けたという逸事が記録されている。杜甫の詩から読み取れる母親像はこの叔母からの影響が大きかったと考えられる。

頼山陽は実母についての詩を多く詠んだ詩人である。頼山陽の母親については、母自身の日記がある。その記述も参考にしながら、頼山陽が詠んだ詩から母親像を読み取った。その中でとくに「送母下高瀬詩」が注目された。この詩は頼山陽の全集には未収録で、遺墨として頼山陽記念館に収蔵されているものであった。全集にはこの時の詩として、「発京」の詩が収められている。しかし、本論で明らかにした頼山陽の母親像からは、「送母下高瀬詩」が「発京」の完成型と考えるのが妥当であった。

杜甫の叔母の逸事を知り、杜甫の詩に読み取れる母親像を明らかにしてからは、私が杜甫の詩を吟じる際の詩吟表現が大きく変わったことが実際に強く感じられた。漢詩作者を理解することは詩吟に影響するのである。最後に私の詩吟実践を通して、詩吟の果たす教育的役割を考えた。10の例について、アンケート、記述式感想をもとに分析を行った。そこからは、詩吟を知らない人が多いが、一度触れると興味をもつようになること、否定的な意見も見られるが、詩吟に触れることで興味に転換することが見て取れた。知らないより知ることが大事で、知ることよりも体験することが大事であることが明らかになった。また、日本語を学ぶ外国籍の方にとっては、書き下し文に節をつけて吟じる詩吟は、日本語表現を覚える1つの有効な方法であること、とくに中国語ネイティブには有効であることもわかった。

日本の老子思想受容と日中における老子思想の現代的展開

張 小 林

2021年、中国の中央電視台で放送された「典籍里的中国」（書物の中の中国）は、中国の古典文化と哲学を解説する番組で、そのなかの1回は『老子道德經』を紹介するものであった。老子の理念は、現代の繁忙でストレスが大きい生活に対抗する方法として提示され、多くの視聴者に受け入れられた。老子の思想は現代にも有効なものと思なされる。そこで、老子思想の現代的展開について、中国と日本において比較検討を行うことにした。

第1章では、老子『道德經』と道教に注目した。まず、老子思想と道教の關係に言及し、日本への伝播を確認した。日本では老子の思想は神道や天皇と関わって、道教的要素が受容されたとする指摘があった。第2章では、老子思想の日本における時代ごとの展開について述べた。地理的近さと漢字の使用が伝来・受容の原因であり、飛鳥時代から奈良時代、平安時代、そして鎌倉時代にわたり、老子思想は日本に根付いていった。近代においては、第二次世界大戦前と現代日本における老子の受容が、学術会や社会に影響を与えたことを指摘した。日本での受容の歴史をたどると、日本では、「天皇」、「無為」などの用語がまず取り入れられ、日本の漢文には「老子」本文を踏まえた用語が多く見られることがわかった。これは日本において「老子」がよく読まれ、受容したことを示している。しかし、「老子」の思想的な面が受容され、哲理を深めたかという点、その痕跡は窺えなかった。日本では、『老子』の哲理よりも、神仙思想、仙人、隱者的考えの面が受容されたという特徴が確認できた。このことは、現代の一般における「老子」受容にも表れている。

近年、中国で話題になった「典籍里的中国」で『老子』が紹介されたが、現代の若者に向けて、中国の伝統文化に親しみ、これからの中国社会を生き抜く知恵を受けるといった点が意識されていた。一方、日本では、加島祥造の一連の老子関連の著作が注目された。これらは、バブル崩壊後の日本の社会人に向けて、とらわれを捨て、多くを求めず、清貧な暮らしを送ることを勧めるものであった。加島本人もまた、長野の伊那谷に隠棲し、仙人のような暮らしをしていた。日本において「老子」とは、若者がこれらからの社会を生き抜くための処世術というよりは、世の中から距離を置き、多くを求めずに生きる人や隱遁する人に向けての思想と捉えられているようである。これには日本での「老子」の思想が、神仙や道教の要素が受容されてきたことと関連があると思われるのであった。

社会生活に生きる国語力の育成について ——奈良女子大学附属中等教育学校の実践をもとに——

岡 田 郁 人

本稿では、社会生活に生きる国語力の育成について、国語教育と総合的な探究の時間との往還による学習効果を検討し、生徒一人一人に国語力を身に付けさせる可能性の提案を目的として論じる。

私は元々、学習指導要領が改訂されたことで、自ら発見した疑問や課題に対して考えさせる活動を取り入れた授業へと変わっている最中であった教育現場で、どのような取り組みが行われているかについて関心があった。また、ESD（持続可能な開発のための教育）の考えをもとに、「授業で身に付けた知識を活用できる探究活動」の授業設計に興味があったことから、国語教育と総合的な探究の時間の接続の可能性について考えていた。そのような折に教育実習で、探究学習に力を入れている奈良女子大学附属中等教育学校へ配属され、本稿は始動した。

まず、第1章では奈良女子大学附属中等教育学校のカリキュラムの特色や教育方針などの取り組みを紹介し、第2章では奈良女子大学附属中等教育学校の「総合的な探究の時間」で行われている探究学習の一つである「コロキウム」の価値について述べた。続いて、第3章では現行の学習指導要領より、国語教育における活動では、図表や写真を伴う「論理的な文章」や「実用的な文章」を書くことや読むことが、他教科等において指導すべき内容となることがあるという記述があるため、その点を国語教育で留意する必要があることを確認した。このことより、教科横断的に学習を行うことのできる総合的な探究の時間で、「論理的な文章」や「実用的な文章」を扱うことが、社会生活に生きる国語力の育成に繋がると整理した。その過程で、「コロキウム」の活動の中に、疑問に思う点が2点あった。それが、構成の視覚化ができていない点と、PDCAサイクルを意識したストーリーのある構成になっていない点である。

その対策として、「ESDプログラムチャート」を使用し、他教科との関連や外部との接続を一目でわかるように配置し、また構成を組むことで、PDCAサイクルを回し、生徒の知識や技能を身に付ける活動の中、教科や領域で学習の往還が行われると考えた。